

ミルトンの『失樂園』の音圧 (dB) の 変化形式が意味するもの⁽¹⁾

森 谷 峰 雄

〔抄 録〕

To know how the emotion changes as the sound pressure in each book is our present concern before synthesized acoustic display of the poem. Emotional changes in the poem are felt as a kind of music of Beethoven. The sound pressure only cannot express the delicate nuance of the emotion; we need other elements for the whole emotional expression. But the sound pressure is the basic medium by which we communicate our emotion; when we are emotionally excited, we often raise our voices. So in the epic. We premise strong sound pressure as an expression of the strong emotion. Hence it occurred to me to represent the emotional changes in terms of those of sound pressure. It is clear that each book has its idiosyncratic pattern of change of sound pressure; hence, emotion is inseparably related with the contents. Most interestingly, the fall of Eve and Adam appears in Book IX as two changes of abnormally high increase of sound pressure of about 80 dB against the average 73 dB.

キーワード：ミルトン、失樂園、音圧、dB、音圧変化形式

ミルトンの「失樂園」を合成音で朗読させ、騒音計で音圧を測定し、一定の量を単位にして、折れ線グラフで表した。この音圧の変化、グラフにおける上昇・下降変化は詩の内容と厳密に呼応していることが分かった。即ち、上昇は、1。詩人（ミルトン）の感情の高まり、2。詩の内容における何かの上昇する運動、3。神の正義、平和、賛美、などの内容、下降は、1。詩人の感情の弱まり、2。表現内容の下降的運動、3。生否定的な内容、苦しみ、絶望、怒、罪などの内容の場合である。ミルトンの芸術に於て、これほど、正確に一致しているのは驚嘆に価する。このような、各巻の音圧変化形式は、各巻の詩のエネルギーの変化を示し、形式それ自体が独立した表現形式のように思われる。即ち、このグラフを見るだけで、ミルトンの詩

的エネルギーが鮮明に分かり、「失樂園」の「もうひとつの自分」(*alter ego*)を見る思いがして、心楽しい気持ちとする。

[方法]

(A) 準備したもの。

1. メロン出版の The File of SERIES, Milton, *Paradise Lost*
2. PC 9801 BX2、プリンター PC PR-201 / 65LA
3. Sound Blaster for 16 スピーカー付き
4. 騒音計 NL14 (リオン社製)
5. 騒音計用プリンター CP10 (リオン社製)
6. レベルレコーダー (リオン社製) LR-04
7. データベースソフト桐V4 統計ソフト SPSS 6.1J

(B) 方法

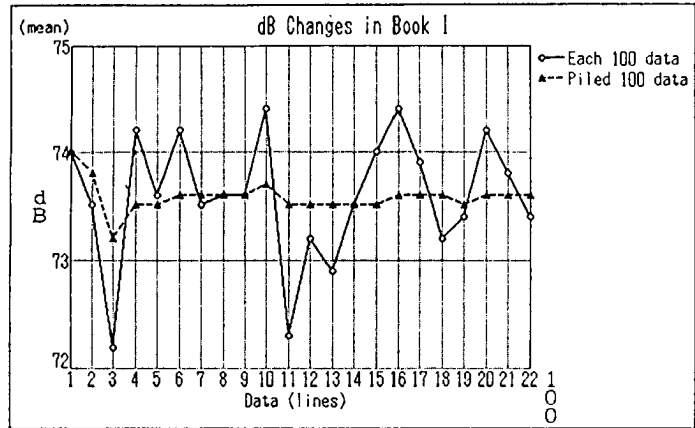
1. FILEOF をテキストリーダーのライトに取り込む。本文から詩文以外のすべての文字、記号を除去する。
2. テキストリーダーの合成音で対象の詩文を読ませる。
 - a. 適当な音量と音質を選択する。
 - b. 外部の影響を避ける為に (暗騒音と対象音の dB 値が10以下になるように) 測定場所を研究室の中、計測時間を、夜の11時から朝の6時頃を選んだ。
 - c. 音の出力レベル、音質などすべての測定において一定にする。
3. 出力された音を騒音計の内部メモリに記憶させる。瞬時の音圧を測定。
4. 記録された音圧をプリンターの記録紙に印刷する。
5. 折れ線グラフの作成
データ量が多いので、100データの平均値を1単位として、平均値の変化を折れ線グラフで表す。

[結果] 以下に述べる。

[第1巻] lines: 798; data: 2174; ldatum=0.367line; hour=36.8m.

[一般的印象] 下降的。サタンの感情の起伏が非常に大きい。主に下降調である。2つの大きい溝があり、地獄に落ちたサタンの気分が現われている。特に、一番目の溝は地獄落下直後の彼の気分の塞ぎのように思われる。

[論点] 二つの溝の意味。具体的にテキストの内容に言及する。



A. (下降) 300 data はテキストでは 0.367×300 lines で約110行あたりの箇所である。その該当すると思われる箇所を引用する。

All is not lost; th' unconquerable Wille,
 And study of revenge, immortal hate,
 And courage never to submit or yeild:
 And what else not to be overcome? (I , 106-9)

この箇所は、音圧で言えば、最低である。ここで気付くのは、And-And-And の *Triplet* で表現される三拍子のリズムである。このリズムは、さ迷う逡巡的な叙情的な、女々しい気持を表す。サタンの表面の勇ましい言葉に反して、空虚さがある。憎しみなどの感情の描写の場合、ミルトンの詩的エネルギーは弱くなる。

B. (下降) 1100 data はテキストに於て、 0.36×1100 で約396行あたりになる。その該当のテキストを引用すると、

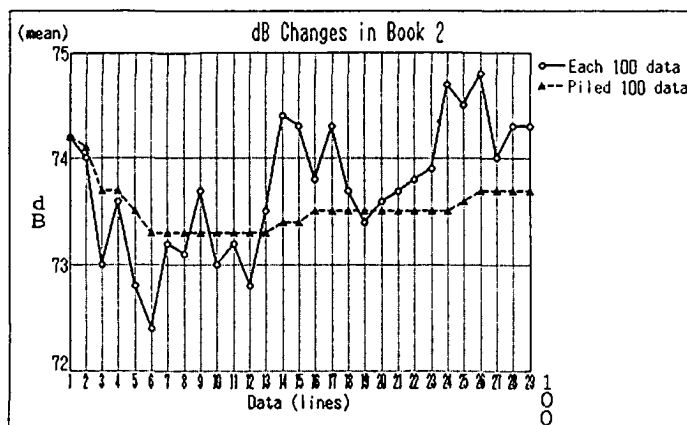
Nor content with such
 Audacious neighbourhood, the wisest heart
 Of *Solomon* he led by fraud to build
 His Temple right against the Temple of God
 On that opprobrious Hill, and made his Grove
 The pleasant Valley of *Hinnom*, Tophet thence
 And black *Gehena* calld, the Type of Hell. (I , 400-5)

ソロモンの精神は特に女性の前には弱く、墮落のアダムの例えに用いられている。このような、人間の墮落の場面を描写するときの作者ミルトンの情緒的エネルギーは低い。従って、dB の値も少ない。

[第2巻] lines: 1055; data: 2955; 1datum=0.359line; lline=2.78data; hour: 49.5m.

[一般的印象] 前半下降的後半上昇的。全体としては下降的である。前半におけるサタン一味の討論と神に仇を討たんと地獄の門を通り、渾沌界を越え、宇宙を飛び出して行く過程が、段々と上昇して行くdBに現われている。

[論点] Aにおける沈みからBを経て、最後に至るまで上昇していて、サタンのエネルギーの回復が見られる。その過程に凹面又は、山高帽子の形をした2つの高台C、Dがある。これらの具体的な内容とdBを照合する。



A. (下降) $600\text{Data}=0.359 \times 600=215$ lines. この部分のテキスト本文はベリアルが発言の内容である。

Thus Belial with words cloath'd in reasons garb
Counsel'd ignoble ease, and peaceful sloath.... (II, 226-7)

音圧が下がったのは、ベリアルの内実のない、空虚な言葉使いにあることが分かる。この次に、マモンが語るのであるが、彼の言葉は彼の心中をそのまま表現している。故に、これ以後音圧は次第に上昇する。

B. (下降) $1200\text{data}=0.359 \times 1200=430$ lines. この辺りのテキスト本文は、

Astonisht: none among the choice and prime
Of those Heav'n-warring Champions could be found
So hardie as to proffer or accept
Alone the dreadful voyage; till at last
Satan, whom now transcendent glory rais'd
Above his fellows, with Monarchal pride
Conscious of highest worth, unmov'd spake.

(II, 423-29)

ミルトンの『失樂園』の音圧 (dB) の変化形式が意味するもの

この箇所はサタンがまさにエネルギーを獲得している状況を説明している。ここを起点として、エネルギーは上昇して行く。それが、dB の上昇に表れている。

C. (上昇) $1400 \text{ data} = 0.359 \times 1400 = 500 \text{ lines}$. この辺りのテキスト本文は、

O shame to men! Devil with Devil damnd
Firm concord holds: men onely disagree
Of Creatures rational, though under hope
Of heav'nly Grace; and God proclaiming peace,
Yet live in hatred, enmitie, and strife
Among themselves, and levie cruel warres,
Wasting the Earth, each other to destroy....

(II, 496-502)

ここに、人類の墮落に対するミルトンの強い予言者的精神が迸っている。ここで、dB の高まりが見られるのである。

D. (上昇) $2600 \text{ data} = 0.359 \times 2600 = 933 \text{ lines}$. この辺りのテキスト本文は、

At last his Sailebroad Vannes
He spreads for flight, and in the surging smoak
Uplifted spurns the ground, thence many a League
As in a cloudy Chair ascending rides
Audacious....

(II, 927-31)

この部分は、丁度、サタンが上昇し始めた所である。それに応じて、dB の価も上昇する。尤も、彼は次に落下するのだけれども。その落下の様子も、dB の低下が呼応している。

but that seat failing, meets
A vast vacuitie: all unawares
Fluttring his pennons vain plumb down he drops
Ten thousands fadom deep....

(II, 931-34)

しかし、次の瞬間 彼は偶然によって吹き上げられる。

and to this hour
Down had been falling, had not by ill chance
The strong rebuff of som tumultuous cloud
Instinct with Fire and Nitre hurried him
As many miles aloft....

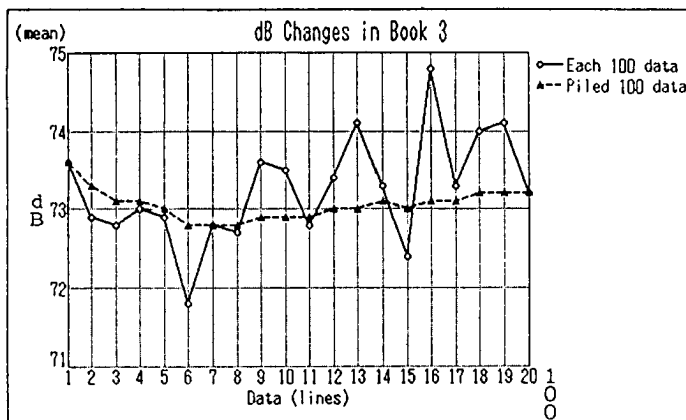
(II, 934-39)

この間の消息を dB の値の変化の形式 — 軌跡 — が物語っている。

[第3巻] lines: 742; data: 2086; ldatum=0, 3671line; lline=2, 72data; hour: 34, 26m.

[一般的印象] 盆地型である。全体として下降的。気分の起伏は大きくない。天国が主場面である BookIII に於て、平均的 dB が下がっているのは不思議である。

[論点] 大きな特徴となっている A, B, C の意味を探る。



A. (下降) $600data = 0.367 \times 600 = 220$ lines. テキストは約220行辺りで、下降している。この部分は：

He asked, but all the Heav'nly Quire stood mute,
 And silence was in Heav'n: on Mans behalf
 Patron or Intercessor none appeerd,
 Much less that durst upon his own head draw
 The deadly forfeiture, and ransom set. (III, 217-21)

驚いたことに、この部分は沈黙の場面である。「全天の合唱団は黙っていた／そして、静寂が天にあった」とある。沈黙の場面であるから、dB は当然下がる。注目すべきは、作者詩人ミルトンが、沈黙の場面に相応しい音響を実際に詩行に創造していると言うことである。ここに、彼の天才が現われているのである。

B. (下降) $1500data = 0.367 \times 1500 = 550$ lines. 550行あたりのテキストの内容は：

With glistring Spires and Pinnacles adornd,
 Which now the Rising Sun guilds with his beams.

 He views in bredth, and without longer pause
 Down right into the Worlds first Region throws
 His flight precipitant... (III, 550-63)

確かに、サタンはここで、天の門から真逆様に遠くの方で輝く星の間を通り抜けて地球に向

ミルトンの『失楽園』の音圧 (dB) の変化形式が意味するもの

かって降って行く。この下降するサタンが不思議なことに、dB の急激な下降によって表わされている。ミルトンはサタンの下降・上昇の運動をまるで、dB の値に合わすかのように、下降するときには力を抜き、上昇するときにはエネルギーを入れて創作したように思われる。

C. (上昇) $1600\text{data}=0.367\times 1600=587$ lines. 大体、587行あたりで上昇の頂点がある。この部分は：

Or other Worlds they seemd, or happy Iles.
 Like those *Hesperian* Gardens fam'd of old,
 Fortunat Fields, and Groves and flourie Vales,
 Thrice happy Iles.....

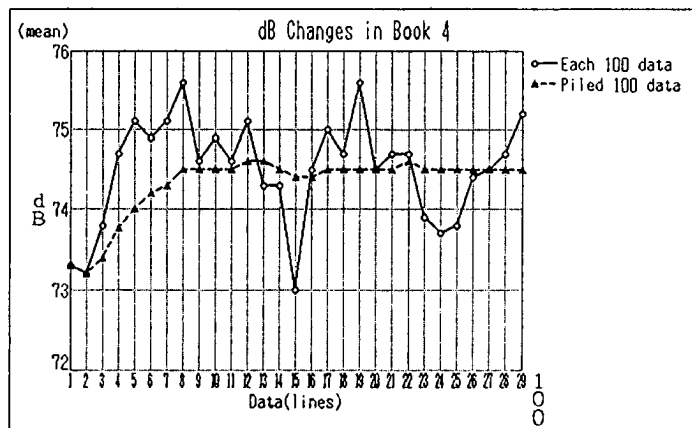
 So wondrously was set his Station bright. (III, 567-87)

この部分には、その内容と dB の上昇に比較すべきサタンの運動はない。しかし、ここに書かれている内容は、引用からも容易に分かるように、楽しい気分のものである。即ち、この部分の情緒は軽やかなものである。それゆえ、ミルトンの感情も楽しくなり、力が入ったものとなっている。逆に、dB の上昇からミルトンがこのあたりの表現に力を注いでいたことは推測される。特に、太陽の明るい輝きに盲目の詩人が憧れの気持をもっていただと思われる。

[第4巻] lines: 1015; data: 2895; ldatum=0.3506line; lline=2.852data; hour: 49.01m.

[一般的印象] 上昇的である。第4巻は楽園の描写であるが、決して平穏でないことが、その音圧の大きい変化によって表される。特に、ほぼ、中央に大きな溝があることに気が付く。

[論点] A, B, C, Dにこのグラフの特徴がある。これらが、それぞれ何を示すのかを見る。



A. (上昇) $800\text{data}=0.35\times 800=280$ lines. 280行あたりのテキストの本文は次のようになっている。

Two of farr nobler shape erect and tall,
Godlike erect, with native Honour clad
In naked Majestie seemd, for in thir looks Divine
The image of thir glorious Maker shon,
Truth, Wisdom, Sanctitude severe and pure,
Severe, but in true filial freedom plac't;
Whence true autoritie in men; though both
Not equal, as thir sex not equal seemd;

..... (IV, 288-96)

これは叙事詩において、初めて人間の創造がでてくる箇所である。人間とは、言うまでもなく、被造物のなかで、最高の傑作品である。神によるこの世の創造はまさに人類を産むためであった。この意味に於て、作者ミルトンがこの描写に最も力を注いだことは容易に想像できる。280行前後の描写は楽園と人類の最初の描写に関する場面である。この辺りの場面の dB 数値の増加変化が示しているように、ミルトンのエネルギーが強まっている。

B. (下降) $1500data = 0.35 \times 1500 = 526$ lines. 約526行あたりにこの dB の下降点があると思われる。この部分はテキストの次の箇所に当たる。

Thir ruin! Hence I will excite thir minds
With more desire to know, and to reject
Envious commands, invented with designe
To keep them low whom Knowledge might exalt
Equal with Gods; aspiring to be such,
They taste and die. . . .

(IV, 522-27)

ここで、dB が低下しているのは、登場人物の動作によるのではなく、内容に原因がある。即ち、ここに、人類の滅びについて書かれているからであると思われる。なぜならば、人類の滅びは作者にとっても、力を失わせる出来事であるからである。

C. (上昇) $1900data = 0.35 \times 1900 = 666$ lines. 大体、666行あたりに、dB のこの急上昇がある。この部分はテキスト本文では次の所である。

To whom our general Ancestor repli'd.
Daughter of God and Man, accomplished *Eve*,
These have thir course to finish, round the Earth,
By morrow Eevning. . . .

(IV, 659-61)

清らかで、純粋の愛を持つ聖性のアダムが同じく無垢の天來の美しい妻に呼びかける部分が相当する。このような場面にミルトンはあるかぎりのエネルギーを出して、歌い上げたことであろう。

D. (上昇) 最後の上昇。2900data=0,35X2900=1014 (lines). 大体1014行付近にDがある。この部分はテキスト本文では、次のようである。

now dreadful deeds
 Might have ensu' d, nor onely Paradise
 In this commotion, but Starrie Cope

.....

The latter quick up flew, and kickd the beam;
 Which *Gabriel* spying, thus bespake the Fiend.

Satan, I know thy strength, and thou knowst mine,
 Neither our own but giv'n...

.....

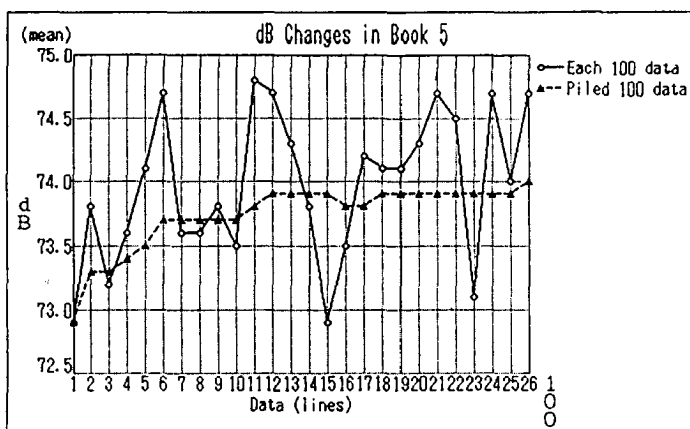
If thou resist. *The Fiend lookd up and knew*
His mounted scale; nor more; but fled
 Murmuring, and with him fled the shades of night. (IV, 990-1014)

驚いたことに、サタンの秤の上昇に合わせて、dB も上昇している。

[第5巻] lines=907; data: 2515; 1datum=0,347line; lline=2,755data; hour=43,3m.

[一般的印象] 上昇型。楽園の全体的雰囲気を示している。しかし、溝が二つ生じて楽園に何かの変化が生じたことを示している。

[論点] 4巻と同じく、上昇的で或るが、全体を通して、大きい起伏が多い。平穏であるべき楽園においてこのような大きな変動があるのは、何故か。それは、サタンの侵入によって、人類の感情が揺るがされたからである。大きい特徴がAからGまで7つある。それらとテキスト本文との照合を行って行く。



A. (上昇) $600 \text{data} = 0.347 \times 600 = 208 \text{ lines}$. 208行付近のテキスト内容は：

Witness if I be silent, Morn or Eeven,
To Hill, or Valley, Fountain or fresh shade,
Made vocal by my Song, and taught his praise.
Haile universal Lord, be bounteous still
To give us onely good; and if the night
Have gatherd aught of evil or conceald,
Disperse it, as now light dispells the dark. (V, 202-8)

ここでも、アダムが大声を上げて祈っている。祈りはミルトンにとって、単なる表面的な言葉の問題でなく、魂に深く根ざした真剣なものである。ミルトンの熱誠の籠もった言葉であるので、それだけエネルギーが大きく、dBに反映されているものと思われる。これは、第3巻のAにおける「沈黙」が支配しているときの描写のdBが急降下しているのとは、全く対照的である。今の祈りの場面は実際は153行から始まっている。その声を上げて神を賛美する祈りの終わりにdBが最高点に達していることは理にかなっている。

B. (上昇) $1100 \text{data} = 0.344 \times 1100 = 381 \text{ lines}$. この部分のテキスト本文は次の通りである。

but *Eve*
Undeckt, save with her self more lovely fair
Then Wood-Nymph, or the fairest Goddess feignd
Of three that in Mount Ida naked strove,
Stood to entertain her guest from Heav'ns; no vaile
Shee needed, Vertue-proof, no thought infirme
Altered her cheek. On whom the Angel Haile
Bestowd, the holy salutation us'd
Long after to blest *Marie*, second *Eve*. (V, 379-87)

人類の母イヴが美しい姿で天使ラファエルに仕える様子を歌っている。世界中のどんなに美しい女でも彼女の美しさにはかなわない。そのようなイヴが裸体で天使に仕える場面にミルトンの心も自然と力が籠もるのであろう。

C. (下降) $1500 \text{data} = 0.347 \times 1500 = 520 \text{ lines}$. 520行あたりのテキスト本文は：

ミルトンの『失樂園』の音圧 (dB) の変化形式が意味するもの

But Say,
What meant that caution joind, *if ye be found*
Obedient? Can wee want obedience then
To him, or possibly his love desert
Who formd us from the dust, and plac'd us here
Full to he utmost measure of what bliss
Human desires can seek or apprehend? (V, 512-18)

ここでは、「神への不従順」という根源的生否定的な内容が中心になっている。否定的内容になると、dB が低下する例を1巻のB、4巻のBで見た。ここに於ても、同じ現象が起きている。

D. (上昇) $2100\text{data} = 0.347 \times 2100 = 729$ lines. テキスト本文を照合する。

Son, thou in whom my glory I behold
In full resplendence, Heir of my might,
.....
Let us advise, and to this hazard draw
With speed what force is left, and all employ
In our defence, lest unawares we lose
This our high place, our Sanctuarie, our Hill. (V, 719-32)

dB の上昇の理由は、神の御子に対する緊迫した戦闘体制の準備を告げているからである。

E. (下降) $2300\text{data} = 0.347 \times 2300 = 798$ lines. 798行。テキスト本文を照合する。

This onely to consult how we may best
With what may be devis'd of honours new
Receive him coming to receive from us
Knee-tribute yet unpaid, prostration vile,
Too much to one, but double how endur'd,
To one and to his image now proclaimd?
.....
.... or can introduce
Law and Edict on us, who without law
Err not, much less for this to be our Lord,

And look for adoration to th' abuse
Of those Imperial Titles which assert
Our being ordaind to govern, not to serve? (V, 779-802)

上は神への反逆を勧める否定的な議論である。神への真の愛を人間の最も尊い宝であると信じる作者ミルトンがそれを捨てることを正当化する議論の展開に心を痛めていることであろう。そのようなエネルギーを削がれる叙述に dB の低下が見られる。

F. (上昇) $2400\text{data}=0,347\times 2400=832$ lines. テキスト本文照合。次ぎの箇所が相当する。

O argument blasphemous, false and proud!
Words which no eare eve to hear in Heav'n
Expected, least of all from thee, ingrate,
In place thy self so high above thy Peers,
.....
Cease then this impious rage,
And tempt not these; but hast'n to appease
Th' incensed Father, and th' incensed Son,
while pardon may be found in time besought.
So spakethe fervent Angel. . . . (V, 809-49)

これは、墮落天使の群れの中にあつて、独り真理を順守したアブデイェルの熱烈な神擁護の演説である。この主旨はまた作者ミルトンのそれに全く一致する。それ故、ここに、ミルトンの白熱したエネルギーが込められていると、考えることができる。そのために、dB が高くなったと思われる。

G. (上昇) $2600\text{data}=0,34\times 2600=894$ lines. この部分に相当する箇所はこの巻最後の方である。

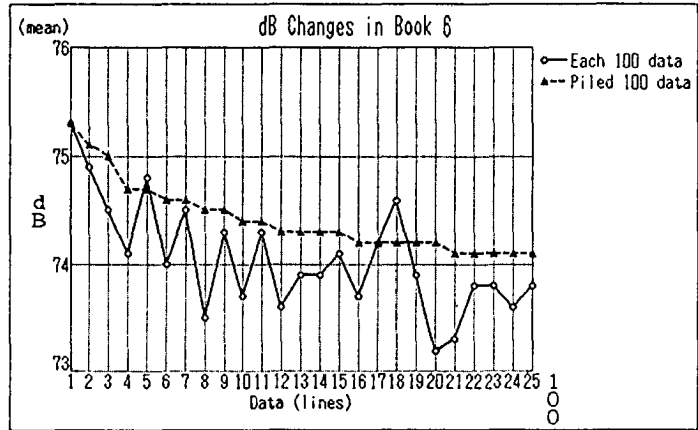
Among the faithless, faithful onely hee;
Unshak'n, uneduc't, unterrifi'd
His Loyaltie he kept, his Love, his Zeale;
.....
On those proud Towrs to swift destruction doomd. (V, 897-907)

この部分の dB の高まりは F のそれと全く同じである。

[第6巻] lines: 912; data=2512; ldatum=0.367line; lline: 2.76data, hour: 42.1m.

[一般的特徴] 一般的になだらかな下降調。この全体的漸進的下降線は他の巻に比べて容易に第6巻の特異性を示す。天上の戦争におけるサタンの弱まりを表現する。このことからミルトンは結局、心の底から戦争を嫌っていたことがわかる。

[論点] AとBがそれぞれ山と谷を成す。その意味を考える。



A. (上昇) $1800data = 0.367 \times 1800 = 661$ lines. テキスト本文照合。

Rage prompted them at length, and found them arms
 Against such hellish mischief fit to oppose.

 Purest at first, now gross by sinning grown.
 The rest in imitation to like Armes
 Betook them, and the neighbouring Hills uptore;

and now all Heav'n
 Had gone to wrack, with ruin overspred,
 Had not th'Almightie Father where he sits
 Shrin'd in his Sanctuarie of Heav'n secure,
 Consulting on the sum of things, foreseen
 This tumult, and permitted all, advis'd..... (VI, 635-74)

正に、この場面は宇宙最大の騒音ということになろう。Aのピークはこれを表している。しかし、全体的に見て、それにしても、dBの値は小さいといわざるを得ない。それは、恐らく、作者自身の感情がそれに伴っていないためであると思われる。

B. (下降) $2000data = 0.362 \times 2000$ lines = 724. テキスト本文照合：

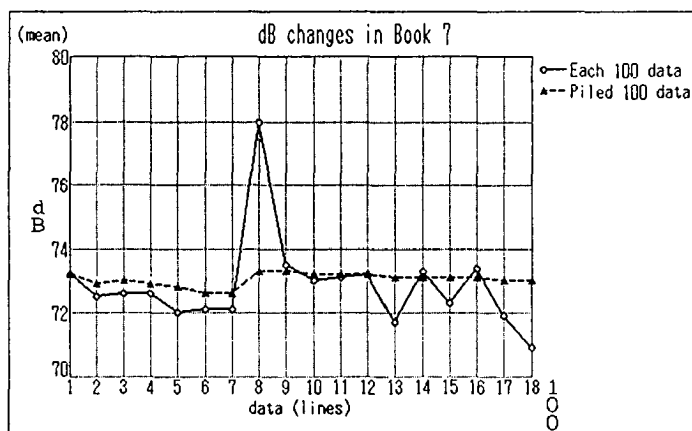
But whom thou hat'st, I hate, and can put on
 Thy terrors, as I put thy mildness on,
 Image of thee in all things; and shall soon,
 Armd with thy might, rid Heav'n of thee rebelld,
 To thir prepar'd ill Mansion driven down,
 To chains of Darkness and th' undying Worm,
 That from thy just obedience could revolt,
 Whom to obey is happiness entire. (VI, 734-41)

神への憎しみ、反逆が主題になっている所では、そこに流れている詩的エネルギーは減少する。しかも、この箇所には下降運動が歌われている。

[第7巻] lines: 640; data: 1765; ldatum=0.362line; lline=2.758data; hour=30, 1m.

[一般的特徴] 非常に穏やかな気分が現われている。しかし、その中で1つの顕著な上昇が見られる。

[論点] Aにおける上昇が何を意味するのか。この穏やかな気分は何に由来するのか。



A. (上昇) $800\text{data} = 0.362 \times 800 = 290$ lines. 290行あたりのテキスト本文照合:

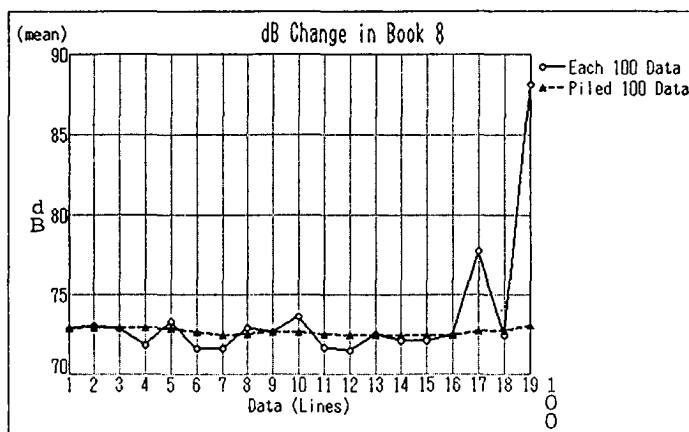
.....and let drie land appeer.
 Immediately the Mountains huge appeer
 Emergent, and thir broad bare backs upheave
 Into the Clouds, thir tops ascend the Skie:
 So high as heav'd the tumid Hills, so low
 Sank a hollow bottom broad and deep,
 Capacious bed of waters. . . . (VII, 284-90)

dBの数値の上昇はテキストにあるように、「巨大な山」の出現を表す。この部分に於てほど、テキスト本文とdB値との関係が絵を見るように鮮やかに現われるところはない。第2の

論点について述べよう。第7巻は天使ラファエルと無垢のアダムとの会話が中心で、未だ、罪を知らない世界の祝福がこの様な、無変化の dB 値に現われている。この場面では楽園へのサタンの侵入はない。同じような場面は第5巻、第4巻にあった。しかし、そこでは、サタンの楽園への侵入により、感情に乱れが著しかった。しかし、ここでは、悪の要素は一点もなく、全てが、楽園の祝福に溢れている。

[第8巻] lines=653; data: 1859; 1datum=0, 351line; 1line=2, 847data; hour: 31, 26m.

[一般的印象] 第7巻と酷似する。唯、上昇が最後の方に、2つあることだけが異なる。非常に、穏やかな気分が流れている。最後の方で天に向かうかのような、高まりがある。
[論点] やはり、最後の2つの高まり A, Bの意味であろう。



A. (上昇) 1700data=0, 351×1700=597 lines. 597行あたりのテキスト本文照合：

Neither her out-side form'd so fair, nor aught
 In procreation common to all kindes
 (Though higher of her genial Bed by farr,
 And with mysterious reverence I deem)
 So much delights me, as those graceful acts,
 Those thousand decencies that daily flow
 From all her words and actions, mixt with Love
 And sweet compliance, which declare unfeign'd
 Union of Mind, or in us both one Soule;
 Harmonie to behold in wedded pair
 More graceful then harmonioun sound to the eare. (VIII, 596-606)

ここに、歌われている内容は、結婚の美しさである。ここに、ミルトンの意識が強く向けられ、彼の全人格を通して、彼の存在の全幅を通して、この内容が述べられている。人間の魂の持つ、美しさが詩人の魂の全幅から響いている。

B. (上昇) $1850\text{data}=0.351\times 1850=649$ lines. 649 行あたりのテキスト本文は：

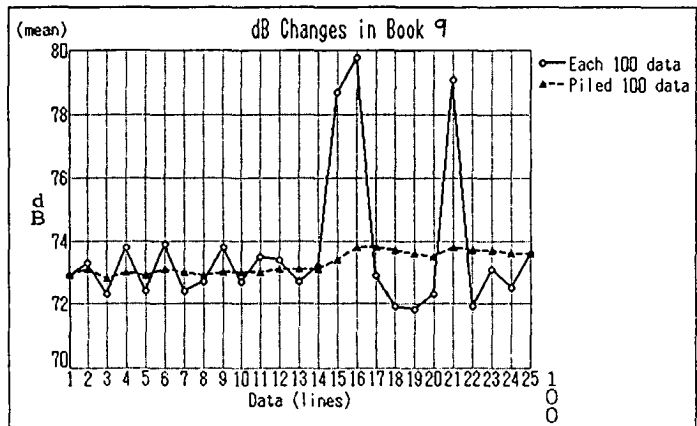
Gentle to me and affable hath been
 Thy condescension, and shall be honoured ever
 With grateful Memorie: thou to mankind
 Be good and friendly still, and oft return.
 So parted they, the Angel up to Heav'n
 From the thick shade, and Adam to his Bowre. (VIII, 648-54)

dB の高まりは天使の天への上昇に一致している。90dB は全巻において、最高の値である。ラファエルの昇天というと上昇運動に呼応して dB 値が極めて高くなっている。全体的な穏やかな雰囲気は第7巻と同じである。

[第9巻] lines=1189; data: 2467; 1datum=0.481line; 1line=2.074data; hour: 41, 5m.

[一般的印象] 穏やかな雰囲気に突如2つのピークがある。この大きい山によって激変化が楽園に生じたという印象を持つ。

[論点] 第9巻は人類墮落の場面を提供する。この巨大な(と思われる)山は何を示しているのか。人類墮落と何らかの関係があるような期待を抱かせる。では、何故2つか、と言う問題が出る。これを考えて見たい。



A. (上昇) $1600\text{data}=0.481\times 1600=771$ lines. 771行あたりのテキスト本文との照合。

Great are thy Vertue, doubtless, best of Fruits,

 Here grows the Cure of all, this Fruit Divine,
 Fair to the Eye, inviting to the Taste,
 Of vertue to make wise: what hinders then
 To reach, and feed at once both Bodie and Mind? (IX, 745-79)

実は、この盛り上がりの部分はイヴの神への不従順の罪——致命の大罪——が犯される直前の部分である。極めて詩的エネルギーが大きい。これに関連する部分は679行から（或いはそれ以前から）始まっている。特に、「丁度、昔、それ以来沈黙しているが、雄弁術が栄えた／アテネや自由なローマで或る有名な雄弁家が、／或る偉大な大義の故に演説をし、悠揚迫らず立って、手足、動作、／仕草の一つ一つが話をする前に聴衆の心をつかみ／時には、彼の正義の熱誠の故に、・・・話の頂点から始めた時のようであった。」(670-76) から分かるように、ここで、サタン大演説が行われているのである。そして、この頂点の直後に、次ぎの箇所が来る。

So saying, her rash hand in evil hour
Forth reaching to the Fruit, she pluckd, she eat:
Earth felt the wound, and Nature from her seat
Sighing through all her Works gave signs of woe,
That all was lost. (IX, 780-84)

急転直下、力は喪失して、限りなく底なし淵に沈むかのようなのである。これが A とその直後の dB の値の激減の意味である。

B. (上昇) $2100 \text{data} = 0.481 \times 2100 = 1011 \text{ lines}$, 1011行あたりのテキスト本文の照合：

O glorious trial of exceeding love,
Illustrious evidence, example high!
.....
Taste so divine, that what of sweet before
Hath touched my sense, flat seems to this, and harsh.
On my experience, Adam, freely taste,
And fear of death deliver to the winds. (IX, 961-89)

これはアダムに対するイヴの必至の説得の試みである。ここでは、引用は避けたが、もっと熱烈な表現は引用の前に出てくる。dB の高まりはこれらの総和である。(照合では多少のずれはある。) この部分を頂点として、次ぎに来るのは、降下である。その内容は次ぎのようである。

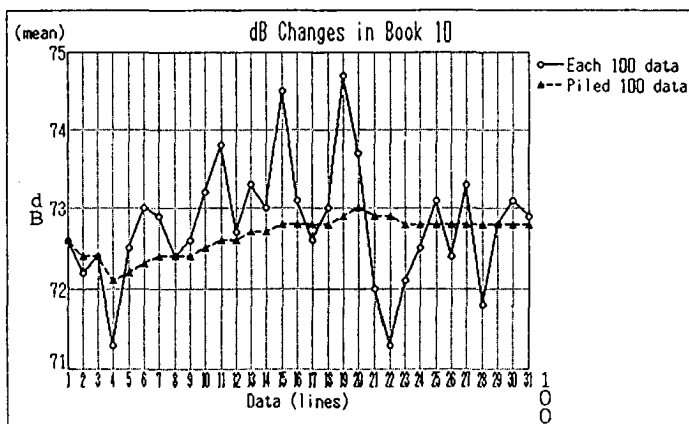
Earth trembl'd form her entrails, as again
 In pangs, and Nature gave a second groan,
 Skie lowr'd, and muttering Thunder, som sad drops
 Wept at compleating of the mortal Sin
 Original. . . . (IX, 1000-4)

Aはイヴの墮落に、Bはアダムの墮落に繋がっていることが分かった。しかもAがBよりもdB値が高いのは、サタンが役者として、イヴより一段勝っていることを示すと思われる。

[第10巻] lines=1104; data=3113; ldatum=0.354line; lline=2.82data,
 hour=52.6m.

[一般的印象] 感情の起伏が大きい。第7、第8巻および第9巻の前半に見られた穏やかな平和な雰囲気はない。不穏な雰囲気が感じられる。楽園或いは楽園に住む人間の精神的荒廃を示しているように思われる。

[論点] A、Cのピークの意味、Cのボトムは何を示しているのか。Cは何らかの裂け目を示しているようである。



A. (上昇) $1500data=0.354 \times 1500=531$ lines.

when conrary he hears
 On all sides, from innumerable tongues
 A dismal universal hiss, the sound
 Of public scorn.....

 dreadful was the din
 Of hissing through the Hall, thick swarming now
 With complicated monsters. . . . (X, 506-23)

サタン一味が神の罰を受け、蛇となり、万魔堂はその舌から爆発するようなしゅう音で響き返っている。dBの高まりはこの為である。これは、ミルトンの高まった感情の表現でもある。

ミルトンの「失楽園」の音圧 (dB) の変化形式が意味するもの

サタンが罰を受けることの同感を心の底から表現しているのである。「爆発するしゅう音」(exploding hiss, 1.546) がこれを示している。

B. (上昇) $1900\text{data}=0.3546\times 1900=673$ lines, 673行あたりのテキスト本文への照合:

He ended, and the heav'nly Audience loud
Sung *Halleluiah*, as the sound of Seas,
Through multiude that sung: Just are thy ways,
Righteous are thy Decrees on all thy Works;
Who can extenuat thee? Next, to the Son,
Destind restorer of Mankind, by whom
New Heav'n and Earth shall to the Ages rise,
Or down from Heav'n descend. Such was thir song,
While the Creator calling forth by name
His mightie Angels gave them several charge,
As sorted best with present things. (X, 641-51)

この dB の高まりは天の群勢の合唱によるものであることが分かる。それは「天の聴衆は声高く／ハレルヤーを歌った」(the heav'nly Audience loud/Sung *Halleluiah*) と明らかに、ミルトンは音響効果を考慮している。これ呼応するかのよう、dB が高くなる。彼が実際に高らかに天上の歌声を表現していることを意味する。

C. (下降) $2200\text{data}=0.354\times 2200=778.8$ lines, 778行の照合。この部分は次ぎの箇所に対応する。

To the loss of that,
Sufficient penaltie, why hast thou added
The sense of endless woes? inexplicable
Thy Justice seems.....
.....
Why am I mockt with, and length'nd out
To deathless pain? how gladly would I meet
Mortalitie my sentence, and be Earth
Insensible, how glad would I lay me down
As in my Mothers lap! there I should rest
And sleep secure; his dreadful voice no more

Would Thunder in my ears, no fear of worse
 To mee and to my ofspring would torment me
 With cruel expectation.

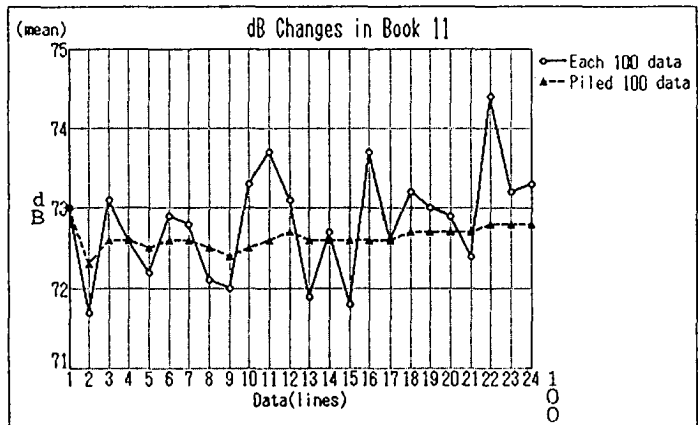
(X, 752-82)

この部分はアダムの悲しみの部分を表現している。彼の失望の心が出ている。彼の精神は弱っている。その弱まりのまた、詩人の創造的弱まりに呼応する。神の義への疑い、心の苦しみが描写される時は、dB の値は下降する。ミルトンの心が沈み、元気を失っている証拠である。この部分をAと比較すると、そのことは明らかである。Aに於ては、神の道の正しさが悪魔の道と対比されて、貫かれている。そして、その時のdB値は上昇している。しかし、今、それがアダムによって疑われているのである。ここには、ミルトン自身の同感はない。

[第11巻] lines=901; data: 2583; ldatum=0, 35line; lline=2, 845dots; hour: 43, 7m.

[一般的印象] 感情の起伏は大きいものの、何か良いほうに、天上のほうに向かって、悪い事態が改善へと向かっている感じがする。

[論点] 降下に人類の悪行、苦しみに対する、否定的な心の沈み、怒りが反映されていると思われる。Bにはその逆の感情が出ている。その他、マイナーなCとDを見る。



A. (下降) 200data=0, 351×200=70, 2 lines. テキスト本文への照合:

Those pure immortal Elements that know
 No gross, no unharmonious mixture foule,
 Eject him tainted now, and purge him off
 As a distemper, gross to aire an gross,
 For dissolution wrought by Sin, that first
 Corrupted. I at first with two fair gifts
 Created him endowd, with Happiness
 And Immortalitie: that fondly lost,
 This other serv'd but to eternize woe;

ミルトンの『失樂園』の音圧 (dB) の変化形式が意味するもの

Till I provided Death: so Death becomes

His final remedie. . . .

(XI, 50-60)

dB 値とテキストの関係が少しずれているようである (これは計算上の誤差からくるものであろう)。ここに歌われているのは、人間の罪を痛む神の側の悲しみと怒である。これを歌う詩人の心も低く、力なくなるだろう。

B. (上昇) $2200 \text{ data} = 0.35 \times 2200 = 772 \text{ lines}$. この部分はノアの方船の描写である。悪人が滅んで、信仰の揺るぎないノアの一家のみが救われる。同時に、この部分の高い dB 値は箱船が海に浮かぶイメージと合致している。

Meanwhile the Southwind rose, and with black wings

Widew hovering, all the Clouds together drove

From under Heav'n; the Hills to their supplie

Vapour, and Exhalation dusk and moist,

Sent up amain; and now the thick'nd Skie

Like a dark Ceeling stood; down rushd the Rain

Impetuous, and continu'd till the Earth

No more was seen; the floating Vessel swum

Uplifted. . . .

(XI, 738-46)

「船は持ち上げられて浮き／漂った」 (“the floating Vessel swum/Uplifted,” 11.45-46) が船の上昇運動を示している。もちろん、これはそのような物理的現象的にのみ適切であるというのではなく、悪人たちの滅び、善人の救いというミルトン自身の道徳観、宗教観から来る強い肯定的感情がある。それが、dB の高値になっていると思われる。

C. (上昇) $1100 \text{ data} = 0.351 \times 1100 = 386 \text{ lines}$. 386行あたりのテキスト本文照合：

To whom thus Adam gratefully repli'd.

Ascend, I follow thee, safe Guide, the path

Thou lead'st me, and to the hand of Heav'n submit,

However chast'ning, to the evil turne

My obvious brest, arming to overcom

By suffering, and earne rest from labour won,

If so I may attain. So both ascend

In the Visions of God: It was a Hill
 Of Paradise the highest, from whose top
 The Hemisphere of Earth in cleerest Ken
 Stretcht out to amplest reach of prospect lay. (XI, 370-80)

驚くべきことに、dBの上昇はアダムと天使が丘に登ることに一致している。

D. (上昇) $1600\text{data} = 0.351 \times 1600 = 561$ lines. 561行あたりのテキスト本文照合：

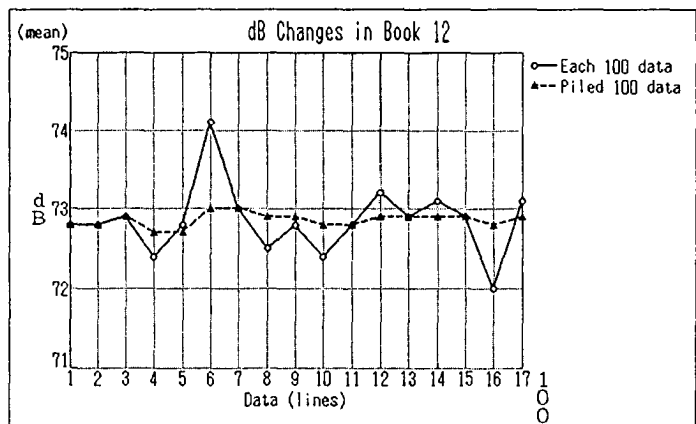
He lookd and saw a spacious plaine, whereon
 Were Tents of various hue; by some were herds
 Of Cattel grazing; others, whence the sound
 Of Instruments that made melodious chime
 Was heard, of Harp and Organ; and who moovd
 Thir stops and chords was seen: his voyant touch
 Instinct through all proportions low and high
 Fled and persu'd transverse the resonant fugue. (XI, 556-63)

ここでは、賑やかな音楽が聞えている場面である。ミルトンの創造力もそれに合わせて、高まったと思われる。どうして、このような一致が見られるかは彼の創造の謎でもあろう。

[第12巻] lines: 647; data: 1787; 1datum=0.363line; 1line=2.75data; hour: 30.2m.

[一般的印象] 非常に穏やかな気分を示す。前半に何かの上昇があり、終結部に降下がある。

[論点] Aの高まりとBの降下は何を意味するか。



A. (上昇) $600\text{data} = 0.36 \times 600 = 218$ lines. 218行あたりのテキスト本文照合：

the Sea

Swallows him with his Host, but them lets pass

As on drie land between two crystal walls,

Aw'd by the rod of Moses so to stand

Divided, till his rescu'd gain thir shoar:

.....when by command

Moses once more his potent Rod extends

Over the Sea; the Sea his Rod obeys. . . .

(XII, 195-212)

ここに歌われているのは、悲惨な現実と直面する神の民に対する神の徹底的現実的救いである。困窮に喘ぐイスラエルの救済にミルトンの心は熱く燃えている。この部分の dB の高まりは、ミルトンの神への信頼、救いの喜びを示している。特に王政復古後の彼自身の生活の困難、死への真面に際して、神の恵に触れた喜びの感動が、イスラエルの民に救いに迫真性を与えている。

B. (下降) $1600 \text{ data} = 0.363 \times 1600 = 580 \text{ lines}$. テキスト本文照合：

He ended, and they both descended the Hill;

Descended, *Adam* to the Bowre. ...

(XII, 606-7)

驚いたことに、dB の降下は、アダムが瞑想の丘から下降する行為と一致している。11巻の C において、二人は丘に登り、第 12 巻の C において丘から降る。dB 値の上昇と下降がアダムの丘の登り降りと一致しているのである。

[結論]

ミルトンの叙事詩に於て、dB の値の変化——上昇と下降——には、本文の内容と密接に係わっているものがあることが、以上の照合に於て、明らかになった。即ち、dB の変化形式そのものが、一つの表現媒体となっている。即ち、dB 上昇は登場人物の上昇運動、肯定的感情の高まり、を示し、dB 値の下降は、登場人物の下降運動、否定的感情の表現を示している。故に、グラフを見ることは、作品の内部構造を読んでいることになる。この様な、解釈は他の詩人たとえば、シェイクスピアの作品にも応用出来るかもしれない。或いは、このような解釈ができるのはミルトンの詩に限られるものなのかは、今後の研究に待つより他はない。もし、後者であるとするならば、ミルトン芸術の世にも特異な天才性を示すことになるろう。

[完]

尚、本研究は1996年度佛教大学の特別助成を得たものである。

(1) 本研究は1996年度日本音響学会秋の大会（岡山大学）で発表したものを発展させたものである。また、本研究の一部は英語によって、1996年12月5日ハワイで開催される米国音響学会と日本音響学会の第3回ジョイント・ミーティングで発表するように招待されている。

（もりたに みねお 英文学科）

1996年10月16日受理